

小学国語問題集 長文読解・発展編

◇本書の特色

1. 中学入試によく出る作家の名文を精選

中学入試の国語長文問題の題材については、文学史に残る作品から現代人気作家の作品まで、幅広く出題されていますが、本書では、それらの中で、近年取り上げられることの多い作家の名文を選びすぎりました。

設問を解くとともに、筆力のある作家が書いた名文を、ぜひ味わってほしいものです。

2. 読解は「言葉」から——重要語句をピックアップ！

文章を読み解く基本となるものは、何といっても言葉、語いです。

もし文章に出てきた言葉をすべて理解できたとしたら、その文章で伝えたかったことがらを読み取ること、あるいは、その文章についての設問に答えることは、ずいぶん楽になるはずです。

逆に、いくつかの言葉の意味がわからないために、読み進めることにつまずき、ひいては、文章全体の内容がうまくつかめなくなってしまう、ということもあります。

本書では、本文中の語句の注釈とは別に、本文・設問中に出てきた、長文読解において特に大切な語句に★印をつけ、それらの語句の意味、用例をP2～P10にのせてあります。ピックアップした語句の中心は、①人物の気持ち・人柄・様子を表す言葉、②抽象的な意味を表す言葉、③よく用いられる慣用表現です。

①は物語・小説文において、②は説明・論説文において、③は文章全般において、読解のかぎとなる言葉（キーワード）と言ってよいでしょう。

これらの語句を一つでも多く身につけることで、日本語をみがき、長文読解力の向上を目指してください。

3. 記述問題は復習が大切！

近年の中学入試は、記述問題の割合が増えている傾向にあります。

記述問題の書き方のコツをつかむためには、まずは、問題をやりっ放しにしないことです。本書では、記述問題の解答欄を二つ設け、一つを「書写用」としています。自分の解答の結果（○・△・×）にかかわらず、演習後は解説を読み、解答例を「書写用」に書き写す作業を行ってください。

「これくらい書いていけばいいや」ではなく、解答例（お手本）を参考とし、内容的に過不足がなく、整った日本語で書かれた文を書くことを目標としましょう。

■本書に出てきた大切な語句■

(調べた語句には☑をしていきましよう。)

あ行

- あいまい【曖昧】はっきりしないこと。「—な表現をさける」
- あえて【敢えて】やりにくいことを押し切^おってするさま。無理に。「—言いにくいことを言う」
- あくまで【飽くまで】①物事を最後までやりとおすさま。「—自説をつらぬく」②ある一定の範囲内に限定するさま。「—推測にすぎない」
- あげく【挙げ句】行き着いた結果。「—した—」「—の果て」
- あざむく【欺く】言葉たくみにうそを言って、相手に本当だと思わせる。だます。「敵を—」
- あぜん【啞然】思いがけない出来事に驚き、あきれて声も出ないさま。あつげにとられるさま。「意外な出来事に—とする」
- あとあじ【後味】物事が済んだ後に残る感じや気分。「事件は解決したが、—が悪い」
- あますところなく【余すところなく】残らず。すべて。「練習の成果を—発揮する」
- あゆみよる【歩み寄る】意見や主張のちがう両者が、条件などをゆずり合う。
- あわれ【哀れ・憐れ】かわいそうに思われるさま。気の毒だ。
- あわれむ【哀れむ・憐れむ】かわいそうに思う。「同病相—」
- (同じ苦しみを持つ者どうしが同情し合う)
- あんじ【暗示】物事を明確に示さず、それとなく知らせること。「将来を—する事件」

- あんど【安堵】安心すること。「—の胸をなでおろす」
- いきをひそめる【息を潜める】そこにいると分らないように、息をおさえてじっとしている。「物陰に隠れて—」
- いげん【威厳】近寄りがたいほど堂々として厳かなこと。「—を保つ」
- いさかい 言い争い。けんか。「—が起ころ」
- いじ【維持】ある状態をそのまま保ち続けること。「現状—」
- いしき【意識】はっきり知ること。気にかけること。「受験を—した勉強を始める」
- いたただか【居丈高】相手を押さえつけるような態度をとるさま。「—に物を言う」
- いたたまれない【居たたまれない】それ以上その場にいられない。「恥ずかしくて—」
- いちおう【一応】十分ではないが、ひととおり。「これで—できあがりだ」
- いっぱん【一般】広く認められ成り立つこと。普通。「—的」
- 「—性」〈反・特殊〉
- いとおしい【愛おしい】かわいく、大事に思うさま。「子ども—のことが—」
- いましがた【今し方】ついさっき。たった今。
- いやみ【嫌味】人に不快な感じを与える言葉や態度。いやがらせ。「—なことをする」「—を言う」
- いやう【異様】様子が普通でないさま。「—な光景」
- いんがかんけい【因果関係】二つ以上のもの間に、原因と結果の関係があること。

第1回

★印の語句はP2～10に意味をのせています。

一 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 問 い に 答 え な さ い 。

(青山学院中等部)

大倉記代が広島赤十字病院に入院したのは、昭和二十九年(一九五四年)十二月、広島市立国泰寺中学二年の冬だった。肺浸潤という結核性の病気で、長期の療養が必要だった。当時十四歳だった彼女は、小児科病棟では最年長者である。記代にとって、発病につづく闘病生活は、苦痛の連続だった。

生まれてまもなく父をうしない、母ひとり子ひとりで育ってきた。生活はけっして楽ではなかったけれど、母娘ふたりのも、ある意味で気ままな毎日だった。その暮らしが、発病とともにいっきよにくずれてしまった。医師の話では、すくなくとも半年の入院と、おなじくらしいの自宅療養をかくごしなくてはならないという。むろん学校は一年間休学となるう。

A 十四歳の少女にとって、一年の留年は、一生の運命をくわされてしまったような気分にはせられた。

最初のころこそ、病気のだから、病気さえなおればと、自分をはげましていたが、それも単調な入院生活がつづくうち、いつしかあせりと絶望のくりかえしにかわっていった。入院したころは、足しげく見舞ってくれた友人たちも、新学期になってからは、めっきり足が遠のいてしまった。二年生の間ならクラスメートだが、進級した級友たちにとって、記代は、もうクラスの友だちではなくってしまったのかも

しれない。

病院のなかに、おなじ年ごろの友人もできればなぐさめにもなるだろうが、あいにく小児科病棟の子どもたちは、小学校にもあがっていないちびっ子ばかりだった。

いや、ひとりだけ記代にちかい年齢の少女がいた。二月の終わりころ入院してきた佐々木禎子である。この少女のことは、看護婦さんや、同室のおとなの患者さんたちのひそやかな会話のなかから、もれ聞いていた。原爆のため白血病という重い病気にかかり、けっして快方におかかってはいないということも知っていた。

まったく病院というところはふしぎなところで、他人の病状については、いつの間にか本人以上に精通してしまふものなのである。

原爆症におかされた少女。記代も最初、そのうわさをきいたときは、すくなからずショックをうけたし、遠くから禎子のすがたを、同情をもつてながめていた。

しかし、そうした悲しいうわさとは★うらはらに、禎子はあきらめるほどほがらかで快活だった。入院して一週間もしないうちに、病棟の子どもたちと仲よくなり、また同室のおばさんたちにもかわいがられるようになった。

あれが重い病気にかかった少女なのだろうか。記代は、ろをかを走りまわり、屋上かけのぼっていく禎子のうしろすがたを、なかば★はぐらかされたような気もちでながめていた。

記代自身はといえば、入院以来、ただただ自分の病気をの

ろい、貝のように自分のからにとじこもっていた。母娘ふたりだけの生活になれてしまったせい、他人との交流が★おっくうな性格でもあった。

同室のおばさんとも、あまり深いつきあひもなかった。小さな子どもたちは、はつきり言って、うるさいばかりだった。せいぜい、ごくかぎられたお気にいりの子どもと遊んでやるくらいだ。こうした記代の態度は、しぜん周囲の患者や看護婦にもつたわり、^C記代のことを★敬遠するようになっていた。すくなくとも、記代には、そうみえたのである。

禎子は、あらゆる面で、記代と対照的だった。サダちゃん、サダちゃんと、おとなも子どももしたしみをこめてよんでいる。彼女の歩くところ、つねに二、三人のちびっ子がくっついてる。

彼女が、よその病室に遊びに行き、おとなの患者さんに髪をあんでもらっている光景を見たときには、この二歳下の女の子に、軽い★しつとのようなものを感じた。

(中略)

天気の良い日、むかひの外科病棟の患者さんが、いたずら半分に、鏡で禎子や記代の顔に、チカチカ日光を反射させる。すると、禎子は★間髪をいれずとびおきると、自分も手鏡をもって部屋をとびだすのだ。ふたりの部屋は北むきだから直射日光があたらぬ。禎子は、日光のあたっているよその部屋にいれてもらって、そこから外科病棟にチカチカのおかえしをするのだ。

小学校時代、サルというニックネームがついていた禎子だ

けに、こうしたすばやい行動は★お手のものだった。

記代には、そんな禎子の活発さが、うらやましくもあった。自分だって、禎子といっしょにはしゃぎまわりたい。心のどこかに、そうした気もちがあったけれど、記代は、そんな気もちをおしつぶして、短く宣言する。

「サダちゃん、すまんけど、ちょっとしずかにしてくれる。いま、本読みよるんよ。」

「あ、ごめん。」

禎子は、まったく★めんぼくなさそうに、こそこそとベッドにもぐりこむのだった。

そういえば、禎子はちかごろ友人がくると、すぐに部屋をでて屋上に行くようすだ。禎子の友人たちは、かならず三、四人がつかだってくる。

中学一年生の見舞い客は、そこにむらがつて立っているだけでにぎやかだ。禎子は、記代に★気がねして、友人たちを屋上につれていくらしかった。友だちも、それほど長くはいなかった。せいぜい三十分ほどでもどってくる。屋上からエレベーターでおりてくる禎子は、そのときだけ、みょうにさみしそうにしていた。友だちは、みな中学生として新しい生活をはじめている。そのなかで、自分ひとり、この白い病室にとじこめられているのだ。禎子の気もちも、記代にもわかるような気がする。

それでも記代は、禎子がときおりうらやましく思えてならなかった。

月に一、二度、禎子は家に帰っていたし、家族の人も、ひ

まをみつけては、病院にやってきた。

とくに母親のふじ子は、足しげくやってきては、病室に泊って行くのである。小ぶどりの母と、小がらな禎子が、だきあうようにして寝ているようすは、いかにも仲のよい親子に見える。

だが、記代には、そんな母娘の寝すがたまでが、なにやら

D★「ふん、なによ。中学生にもなって。みっともないったら、ありやあしない。」

そんな舌うちのひとつもしたくなる。

記代の母は戦前からの職業婦人だったせいとか、あつけないほどさばさばしていて、とても記代と、そい寝なぞしてくれそうもなかった。記代だって、そんなべたべたした母娘の關係は★ねがいさげだった。いや、もしかしたら記代も、母親に思いきりあまえたかったのかもしれないが……。

六月にはいると、禎子の病状がふたたび悪化してきた。一時、縮小していた首のリンパ節が肥大してきた。脾臓のはれも、医師の触診によると、指二本のはばのしこりができている。

ただ、白血球数だけは、輸血の続行によって、なんとか一万から二万までの間を★維持していたが、それとても正常人の二倍をこえる数値だった。

そのころ、おなじ小児科病棟に入院していた五歳の女の子が死亡した。禎子とおなじ急性白血病患者である。まだミルクのおいがのこっていそうな、色白の少女を、禎子はもち

ろん、記代もよく知っていた。

少女の死んだ夜、ふたりはどちらともなく、少女におわかれをすることにした。女の子のなきがらは、病院の靈安室に安置されていた。ふだんは、気味が悪くて、昼間でも近よれそうもない死者の部屋に、ふたりはなんの恐怖感もなくはいることができた。

簡単な祭壇の前におかれた小さな棺のなかに、少女は眠るようによこたわっていた。ふたりは、お線香をあげ、長い間、掌をあわせた。

外は、つゆの雨が、だらだらとふりつづいていた。おまいりをおえて、病棟に通じるうす暗いわたりろをかを歩いたときだった。

ふと、うしろを歩いていた禎子が立ちどまった。

「うちも、ああして死ぬんかしらん……」

禎子のつぶやくような低い声に、記代はおどろいてふりかえった。禎子は、わたりろうかの中ほどに立って、暗い雨の庭を見つめていた。

「ばかなこと、いいんさんな！」

記代は、思わず知らず、両手で禎子の肩をつかんだ。禎子の体にくれたのは、これがはじめてだった。うすいゆかたの布地をとおして、禎子の異常に骨ばった体の感触が、記代の指さきにつたわってきた。

（この子は、こんなにやせていたのか。）

それは、ふだん快活にふるまっている禎子のものとは信じられないくらいに、細くてよわよわしかった。

「姉ちゃん。」

禎子が、たまりかねたように記代の胸に顔をうずめて泣きはじめた。この子は、自分の病氣のことを知ってるんだ。知っていて、必死で耐えている。そう考えると、いままでの禎子の行動が、がらりとちがって見えてきた。彼女が活発に行動するのも、母親にあまえるのも、せまり来る死の恐怖とたたかっているすがたではなかったのか。

「サダちゃん……。」

記代は、泣きながら、心の底からしたしみをこめて、彼女をだきしめた。大がらな記代のうでのなかで、禎子は、いつまでもいつまでも泣きつづけた。

おもえば、佐々木禎子が、生命の燃えつきる最期の時期に、大倉記代にめぐりあったことは、ただひとつのなぐさめだったといえる。

家のなかでは、つねにものわかりのよいお姉さんとして、妹や弟をかわいがり、入院後も小さな患者のめんどうをみていた禎子にとって、生涯にただひとり、胸に顔をうずめて泣くことのできる、お姉さんにめぐりあえたのだ。

この夜以来、記代と禎子は急速にうちとけていった。

(那須正幹『折り鶴の子どもたち』)

問一 —— A 「十四歳の少女にとって、く 気分になせられた」とあるのはなぜですか。次から選びなさい。

ア 学校は自分にとって日常生活の中心であり、級友から自分だけ取り残される感じがしたから。

イ 元は元気だった十四歳の少女にとって、一年もの間運動できないのはたいへん苦痛だから。

ウ 休学する一年間の勉強の遅れは相当なもので、おそらく将来の進路にかかわってしまふから。

エ 母娘ふたりでつましく暮らしてきたのに、入院にかかる費用は生活を苦しめてしまふから。

問二 —— B 「他人の病状については、いつの間にか本人以上に精通してしまふ」のはなぜですか。次から選びなさい。

ア 病院は病気にに関する情報があふれているため、誰に聞いても教えてくれるから。

イ 本人の前では病状についてふせている一方、いないところで話題になるから。

ウ 患者たちは身近な親族より、他人の方が気がねなく病状を打ち明けられるから。

エ 外の世界からへだてられているぶん、病院内の情報を皆知りたがっているから。

問三 —— C 「記代のことを敬遠するようになっていた」のはなぜですか。解答欄にあうように本文中から二十字以内で見つけ、はじめと終わりを三字ずつ書きぬきなさい。

□

記代が（二十字以内）から。

問四 文中に出てくる二つの「うらやましく」について、次の問いに答えなさい。

① 記代は禎子のどのようなところをうらやましく感じたのですか。周囲との関わりをふまえて二十五〜三十字で説明しなさい。

（書写用）

② 禎子をうらやむ心情を短く言い表した語を本文中から三字で書きぬきなさい。

問五 — D 「うとましく感じられてならなかった」のはなぜですか。「くから。」につながるように十四字で見つけ、はじめと終わりを三字ずつ書きぬきなさい。

から。

問六 — E 「せまり来る死の恐怖とたたかっているすがた」とありますが、そのように感じられたのはなぜですか。

ア 死がせまっていることを周囲に隠し、母親の前でも

★ 気丈にふるまっていたから。

イ 死をも恐れずに病氣と正面から向き合って、周囲の人たちに元氣を与えたから。

ウ 間近にせまる死を受け入れずに、希望を持って日々を明るく過ごしてきたから。

エ 死を予感しながらも快活さを失わず、母に甘えることで自分を支えていたから。

--

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(東邦大学付属東邦中)

〔質問〕 若い人が文末にやたらに「し」を付けて話すのが気になります。「し」をこのように使ってよいのでしょうか。

〔答え〕 「くし」は、普通、「この本は安カだし、装丁も悪くない」のように、二つ以上の事柄を並べるのに使います。しかし、最近では、「なぜ、遅刻したんだ」「だって、雨も降ってたし。」のように、文末で理由を述べるのに使われることがあります。また、相手がばかげたことをしたときに、「わけわかんないし。」のように、文末で自分の気持ちをそのまま示すのに使われることもあります。

A、最初の理由を表す用法について見ていきましょう。若い人から「だって、雨も降っていたし。」と答えられると、年配の人は、ほかに何か理由があるのか、と問い直したくなります。「くし」は事柄を並べるので、当然、ほかに理由があるだろうと考えるからです。

では、年配の人は、これに類した表現はしていないのでしょうか。B、「最近、A社との取引が減ったのはなぜか」と上司に聞かれたとします。「それなんですけど、先方の担当者も替わりまして…」のように答えることもあるのではないのでしょうか。このとき、「他の理由は何か」などと ① 即座に問い直されると考えているでしょうか。

「先方の担当者も替わりまして…」という答えと「先方の担当者が替わったからです。」という答えとを比べてみましょう。

「くから」を使うと理由をそれに限定して、他の理由を排除するのには、「くて」だと、現時点の分析で考えられる理由を挙げたという★ニュアンスが感じられます。とりあえずの理由付けですから、より詳細な分析が出たり、もっと的確な理由が見いだせたら、★撤回することも★やぶさかでない、という意味合いももたらされます。

この効果は、「くて」で列挙する形をとることと、その最初のものとして「先方の担当者が替わった」という事柄を挙げた形にすることからもたらされます。最初に出されるものは、現時点で思いついたものであるとも、最も重要であると見なされたものであるとも★解釈できます。列挙の形をとること、他の可能性も★示唆されるのです。

② 「から」や「ので」で理由を示すと、このような効果は期待できません。「担当者が替わりました」という状況は、「取引が減った」ことの一要素インですが、それにどう対処したかといったことも理由として考えられます。それを「担当者が替わったからです。」などと状況に限定して示すと、「そんなことが理由になるか、替わったら替わったんりのことをやれ」と言われてしまうでしょう。「担当者が替わりまして…」という答えは、それなりの対処もしているし、他の理由もあるかもしれないが、新しい担当者がなにしる★難物で…といった★含みがあるので、こうした文句もひとまずは避けられます(ただし、文末の「くて」は、「こっち来て」といった命令や「もう、帰っちゃって」のような非難など、さまざまに表現にも使われます。「くて」は、★あくまで、文脈に支えら

れて、理由の列挙に用いられるに過ぎません。

若い人たちが使う、理由を表す「くし」も、これと同様だと考えられます。その時点の最も大きな理由を「くし」で示しています。

④ 「くし」は、「くて」のような臨時の形ではなく、「くので」や「くから」では表せない部分を補っています。「明日、どうしましょうか」「いや、〇〇も××し」のような会話は、学校でも職場でも使われているでしょう。ここに「台風も近づいている」「監査もある」など、サイ考を促す一番大きな理由を入れて示す表現として、安定して使われているようです。

もう一つの、若い人が使う「わけわかんないし」のような表現は、理由の用法からさらにもう一步進めた形です。「くから」や「くので」には、「あんななんか、もう、知らないから。」とか「では、もう帰りますので。」のような自分の気持ちを伝える文末用法があります。これは、「あなたのことは考えない」とか「帰る」ということを理由にして、もう、この

場でこれ以上の働きかけはないことを表します。「わけわかんないし。」もこれと同様に、現時点で自分は、相手の言動に対し「わけがわからない」という以上のコメントはないので、それ以上の※リアクションは求めないでくれ、ということですが、「くし」の理由の用法は、まさに「D」の表現から生じたものです。「くから」や「くので」にない、さまざまな含みをもたらし、相手への思いやりの効果も出せます。しかし一方で、理由を限定することが求められている場面で「くし」を使うと、その場しのぎの思いつきを述べているのではないかと、きつちりと決められない★優柔不断な態度であると見なされたりすることもあります。「くし」ばかり使うと、せっかくの効果も薄れてしまいます。「くから」や「くので」と、うまく使い分けるようにしたいものです。

（北原保雄編『続弾！問題な日本語』）

※難物：あつかいにくい人物。
※リアクション：反応。

問一 線 a く c と同じ漢字を使うものを次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|-----|---|----------|---|-----------|
| a | 安力 | ア | 力否を論ずる。 | イ | 成力を収める。 |
| | | ウ | 対力を求める。 | エ | 体力を力信する。 |
| b | 要イン | ア | 敗インを考える。 | イ | 酸素を吸インする。 |
| | | ウ | 退インを喜ぶ。 | エ | 紅茶を愛インする。 |

Ｃ サイ考

- ア 布地をサイ断する。
- イ 民話をサイ集する。
- ウ サイ礼をとり行う。
- エ 名場面をサイ現する。

a

b

c

問二

A C にあてはまる言葉としてもっとも適切なものを次のア～カの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア まず イ なお ウ やはり
- エ まるで オ たとえば カ あたかも

A

B

C

問三

——線①「即座に問い直されると考えているでしょうか」の表す意味としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 即座に問い直される考え方をしてはいけない。
- イ 即座に問い直されると考えているはずはない。
- ウ 即座に問い直されても考え方を伝えるべきだ。
- エ 即座に問い直されたらすぐに考えるほうがよい。

問四

——線②「『から』や『ので』で理由を示すと、このよ

うな効果は期待できません」の説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「て」によって理由を説明すると、列挙の形をとることによって現時点での思いつきであるというニュアンスを持たせながら、さまざまな理由を周囲の雰囲気かんいに合わせ、詳細に説明することができる。このような効果は、理由をそれに限定してしまう「から」や「ので」を使って表現することはできない。

イ「て」によって理由を説明すると、現時点の可能性として考えられると、現時点の理由を述べた上で、これから詳しい分析や的確な理由を追求していくことを相手に伝えて、いさかきを避けることができる。このような効果は、理由をそれに限定してしまう「から」や「ので」を使って表現することはできない。

ウ「て」によって理由を説明すると、今考えられる理由を挙げてみたという含みを感じさせると同時に、事柄を並べる形をとることによって、最も重要な理由であるかもしれないという可能性をほのめかすこともできる。このような効果は、理由をそれに限定してしまう「から」や「ので」を使って表現することはできない。

エ「て」によって理由を説明すると、その理由には複数の可能性が存在するのだというニュアンスを感じさせる効果があり、さらにその複数の可能性はどれも自分の現時点で考えられる理由にあてはまらないことを表現できる。

このような効果は、理由をそれに限定してしまう「から」や「ので」を使って表現することはできない。

問五

——線③「このような『くし』は、聞き手に配慮した思いやりの表現だとも言える」とありますが、これは「くし」にどのような働きがあるからですか。そのことを説明した次の文の にあてはまる言葉を本文中から二十五字以内でぬき出し、最初と最後の三字ずつを答えなさい。(句読点、記号等も字数に数えます。)

理由を表す「くし」には といったニュアンスを聞き手に感じさせる働きがあるから。

く

問六

——線④『くし』は、『くて』のような臨時の形ではなく、『ので』や『から』では表せない部分を補っていただきます。について、次の1・2に答えなさい。

1 「臨時」は、どのような意味ですか。もっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア さしあたって
- イ にはさておき
- ウ 予想に反して
- エ まず第一に

2 「くし」が補っているのは、どのような表現ですか。もっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 聞き手に対する思いやりの気持ちを表しながらも、理由付けをして拒否きよひしたい心情をなんとか伝えようとする表現。

イ ある事柄に対してさまざまな理由付けを考えることができるが、★あえてその理由を一つにしぼりこもうとする表現。

ウ さまざまな事柄を取りあげながらそれぞれの理由はあげず、一番大きな理由だけで相手を納得なっとくさせようとする表現。

エ いくつかの事柄が存在そんざいするという含みを持たせながら、最大の理由を示して考え直すようにしむけようとする表現。

問七

——線⑤「理由の用法からさらにもう一步進めた形」とは、どのような表現であると考えられますか。そのことを説明した次の文の にあてはまる言葉を本文中から五字でぬき出して答えなさい。

「くから」や「くので」と同様に、自分からの積極的な働きかけはないことを表現し、との関わり合いを避けたいという気持ちを伝える表現。

問八

D

にあてはまる言葉としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 親愛 イ 余情 ウ 不確実 エ 不正確

問九

~~~~線「若い人が文末にやたらに『し』を付けて話するのが気になります。『し』をこのように使ってよいのですよか」という質問に対して、筆者はどのような考えを述べていますか。もっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 若い人が「くし」を多用している現状は、しかたがない。しかし、「くし」では理由の列挙に終わってしまうため、真意が伝わらなくなる可能性も否定はできない。したがって、「くし」のもたらず効果を生かすためには、場面に応じて他の文末表現と使い分けをすることが重要だ。

イ 若い人が「くし」を多用している現状を、否定はしない。しかし、「くし」はさまざまな含みをもつ表現であるため、話し手が状況に応じた使用を心がけないと誤解を招くこともある。「くし」のもたらず効果を生かすためにも、場面に応じて他の文末表現と使い分けをすることが重要だ。

ウ 若い人が「くし」を多用している現状を、否定できない。なぜなら、「くし」は聞き手に配慮した思いやりの心を表現できるため、人と人との関係をよりよくする言葉だからである。ただし、「くし」のもたらず効果を生かすためには、場面に応じて他の文末表現と使い分けをすることが重要だ。

エ 若い人が「くし」を多用している現状には、賛成できない。なぜなら、「くし」では理由を限定することができないため、他人から優柔不断な性格だと判断されてしまうこともあるからである。「くし」のもたらず効果を生かすためにも、場面に応じて他の文末表現と使い分けをすることが重要だ。